

令和7年度小学校教科担任制実施報告書(高学年型)

学校名
廿日市市立阿品台西小学校

1 学校の概要

(1) 学校の学級数

	通常学級							特別支援学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
学級数	2	2	3	3	3	3	16	4	20

2 加配教員が専科指導を行う教科及び週当たりの担当授業時数

(1) 第5、6学年の指定教科

指導教科名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
理科	6	3	3	9	
理科	5	3	3	9	

授業時数 計 18 (a)

(2) その他

指導教科等名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
書写	5	3	1	3	

授業時数 計 3 (b)

授業時数 合計 21 (a)+(b)

3 教科担任制推進教員を配置した授業計画

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	5		3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	2	1	2	1
6年 1組 (担任: A)	B	専科	C	A	推進	専科	A	専科	A	C	A	A	A
6年 2組 (担任: B)	B	B	C	A	推進	専科	B	専科	B	C	B	B	B
6年 3組 (担任: C)	B	専科	C	A	推進	専科	C	専科	C	C	C	C	C


教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	5		2.9	5	3	1.4	1.4	1.7	2.6	2	1	2	1
5年 1組 (担任: D)	D	推進	F	E	推進	専科	D	専科	D	F	D	D	D
5年 2組 (担任: E)	D	推進	F	E	推進	専科	E	専科	E	F	E	E	E
5年 3組 (担任: F)	D	推進	F	E	推進	専科	F	専科	F	F	F	F	F

4 高学年担任が指導を行う教科等及び週当たり授業時数

学年・学級	児童数(人)	担任	担任する学級以外の授業時数(週当たり)				担任する学級の授業時数	授業時数の合計
			指導学年・学級	教科等名	時数	時数計(c)		
6-1	28	A	6-2	算数	5	10	13	23
			6-3	算数	5			
6-2	29	B	6-1	国語	4	8	13	21
			6-3	国語	4			
6-3	28	C	6-1	社会	3	10	13	23
			6-2	社会	3			
			6-1	外国語	2			
			6-2	外国語	2			
5-1	27	D	5-2	国語	4	8	12	20
			5-3	国語	4			
5-2	27	E	5-1	算数	5	10	13	23
			5-3	算数	5			
5-3	27	F	5-1	社会	2.9	9.8	12.9	22.7
			5-2	社会	2.9			
			5-1	外国語	2			
			5-2	外国語	2			

5 成果と課題

(①授業の質の向上、②多面的な児童理解、③小・中学校の円滑な接続、④教師の負担軽減、⑤その他)

〈効果のあった取組〉	
①	<ul style="list-style-type: none"> ●担当教科が絞られ、教材研究の深化を図ることができた。 ●児童の実態に応じて、指導方法に変化を加えた。また同じ内容を複数回行うため、1回目の授業でうまくいったこと、うまくいかなかったことを整理し、授業改善を行った。 ●校内ICT活用実践事例集をデータ化し、蓄積した。
②	<ul style="list-style-type: none"> ●複数の教員が見ることで、様々な場面での児童の様子を知る機会が増えた。 
③	●教科ごとに指導者が変わる体制作り
④	●一人の教師が指導する教科を減らし、空き時間を確保した。



〈成果〉	
①	<ul style="list-style-type: none"> ●専門性の高い授業を行うことで、児童の興味・関心をより高めることができた。 ●児童の実態に応じて、学級ごとに少しずつ指導方法を変えることがあっても、同じ教員が指導することで指導に一貫性が生まれ、学力向上に繋がった。児童アンケートにおいて、「勉強の内容がよく分かるようになった」と肯定的な回答をした児童の割合がR6年度：89%⇒R7年度：93%に上がった。 ●担当していない教科指導法を学ぶことで、次年度への不安が軽減された。
②	●一人の児童に対して、さまざまな捉え方が窺い知れ、思い込みによる指導を防ぐことに繋がった。また、学年間での児童理解が深まり、生徒指導上の問題を学年全体で取り組みやすくなった。
③	●児童アンケートで、82%の児童が「中学校から教科ごとに先生が変わることに対する不安がなくなりました」と回答している。「小学生で経験することで、中学生になったときに対応しやすいと思うから」といった肯定的な理由を書いている児童もいる。
④	●一人の教師が教える教科が少なくなり、効率よく仕事を進めることにつながった。空き時間が増えることで、その時間を担任業務や校務分掌などに使うことができ、心にゆとりが生まれ、児童に向き合うことができた。

〈課題〉	
②	●児童に指導するタイミングが難しい。指導したい事案が起こっても担任も他クラスの授業へ行かなければならず、すぐには指導できない場合が生じる。
④	●時間割の作成と時数確保が困難である。専科、講師、体育館、運動場の割り振りなど多くのことに気を配りながら、何度も組み直す必要がある。教員によっては空き時間が少ないなどばらつきが生じる。また、学校行事や祝日などにより、時数が不足する教科が生まれ、調整が難しいことが多々あった。



〈対策〉	
②	●学年間で児童に関する情報をすぐに共有することで、対応を共に考えることができた。また、管理職や生徒指導主事にも相談や報告を行い、誰がどの時間にどこでどのような対応をするか、組織的に対応策を講じることができた。
④	●年度初めの時間割を組む作業を複数名で分担し、重複がないか確認しながら作業を進めることで、時間割を組むことができた。また、昨年度より取り入れた仕組みとして、祝日が多い月曜と、他の曜日を年に数回時間割を交換することで、時数不足を解消することができた。